

環境の時代を考える

大阪園芸療法研究会会長 太田 周作

植物と人間との関わり -小笠原諸島を訪ねて-

長い間の念願がかなって、2001年7月に小笠原諸島の父島と母島を訪れることができた。若い頃より熱帯植物の栽培に携ってきた私にとって、この島はあこがれの地の一つであった。

小笠原諸島は東京の南1,000キロの太平洋上に点在する30余りの島々からなり、亜熱帯に位置している。海底火山により生じたため、一度も大陸とつながったことの無い、日本では唯一の海洋島である。そのため固有の生物が多く、東洋のガラパゴズと称されている。戦後、アメリカの占領下にあったが、1968年に返還され、東京都に属している。一般に海洋島の固有種の特徴として、環境の変化に弱く、外来種との競争に負けて短期間に絶滅に向かうことが多い。

日本返還後、小笠原に関する記事が、新聞や雑誌に度々掲載されるようになったが、農業や植物に直接関係するものをいくつか拾い出してみた。

- ・戦前、薬用や食用目的に移入されたアフリカマイマイが大繁殖し、食害のため野菜栽培が不可能。
- ・開拓初期から飼われていたヤギが野生化し、森林を食い荒らしている。占領下に狩猟のため、各島に放ったことも被害拡大の一因である。
- ・有用樹木として戦前沖縄から移入されたリュウキュウマツ、シマグワ、アカギが原生林に侵入し、生態系を破壊している。
- ・アサヒエビネ等、ラン科の固有種が大量に盗掘され、まったく見かけなくなった。
- ・ムニンノボタンが一株のみとなり、東大付属植物園で増殖への取り組みが始まった。
- ・ムニンツツジが一株しか確認されなかった。等々。

以上の記事が書かれてから、私が島に旅する迄、30～20年余の時間が流れていた。そのため、この旅の目的は、それらの現状を観察することにあつた。

- ・アフリカマイマイは1980年代に原因不明のまま絶滅した。父島滞在中一匹見つけたのみである。
- ・ヤギの駆除は1997年に始まり、大量捕獲されて、島々から姿を消しつつある。滞在中、父島の山中で、小さな群を一度見かけただけである。
- ・リュウキュウマツは1979年からマツノザイセンチュウ（松枯れ病）により一斉枯死が始まり、今では一部の斜面等に残っているに過ぎない。
- ・養蚕のため移入されたシマグワは、戦前木工用として大量に伐り出され減少した固有種のオガサワラグワに交雑し、若木のほとんどを交雑種に変えてしまった。そのため純粋



写真1 植え戻されたムニンノボタン

のオガサワラグワの実生栽培が試みられている。

- ・アカギは環状剥離や伐採等の駆除対策がとられているが、効果は少く、まだまだ分布を広げていて、原生林でも目立つ存在になっている。
- ・アサヒエビネはわずかな株が、盗掘防止の柵で守られ、人工繁殖された苗も植えもどしされている。
- ・ムニンノボタンは最後の自生株もすでに枯死していたが、それ以前に東大でさし木繁殖され、その種子からの実生にも成功し、1987年より植えもどしが始まり、今ではすっかり定着して二世も確認することができた（写真1）。また、1993年に新群生地が発見されたが、後で別系統であることが判明している。
- ・ムニンツツジも自生株は枯れてしまったものの、東大で育苗したものを1987年から自生地周辺に植えもどし、開花結実に至っている。

以上、過去の記事と、主に島で見聞したことを列記しただけであるが、コメントを加えなくても、環境や自然保護のかかえる問題点が自ずから浮かびあがってくる。小笠原はその縮図だと改めて実感した。

最後に私の園芸家としての心情を吐露すると、移入種に対する「昔善王、今悪役」のレッテルは人間の身勝手な極みであつて、同情さえ禁じえない。また、絶滅寸前の固有種の繁殖と植えもどしに取組んだ人達に拍手を送りたい。地球上から生物の種の一つでも消滅してしまうのはやはり悲しい。どのような形であれ、いつまでも生き残ってほしいと願うだけである。

Contents

- P1 環境の時代を考える
- P2 「菜の花プロジェクトみのお」の挑戦
- P3 ユニバーサル・デザイン
- P4 レイチェルカーソン/生誕100年  
2006年環境総研講座